

読書におけるデジタル選好の規定因 ——文書内容と媒体への慣れの影響——

大橋 恵*

Determinants of Digital Reading Preferences —The Influence of Document Content and Familiarity with Medium—

Megumi M. OHASHI*

1. はじめに

1.1 紙とデジタルでの読書

日本の出版物の売上は1996年をピークに減少し、2022年には最盛期の半分以下となった。一方、2010年頃から急成長したデジタル書籍は全体売上の約1/3を占めるに至っている⁽¹⁾。このような変化は学校教育にも及び、新学習指導要領で掲げられた「主体的・対話的で深い学び」の実現に加え、特別な配慮を要する児童生徒等の学習上の困難低減の観点から、紙の教科書と併用してデジタル教科書の使用が認められるようになった⁽²⁾。このように近年ではさまざまな文書を紙へ印刷した物ではなくPCやスマートフォン・タブレット等の画面（以下、デジタルとする）で読むことが急速に一般化しつつあることから、デジタル媒体と紙媒体の特性や使い分けに関する科学的な理解が求められる。

媒体の選択には個人差や状況差があると考えられる。本研究は、何が人にデジタル読書を選ばせるのか、特に読むものの内容とデジタル読書経験量との関係に焦点を当て、その傾向を明らかにすることを目的とする。

以下では、まず紙媒体とデジタル媒体の主な特性について概観する。これまでの研究では、読みやすさ・疲れやすさ・検索しやすさなどさまざまな面から両者の比較検討がなされてきた。会社員800名余を対象とした調査では⁽³⁾、紙は、デジタルに比べ、読書に没頭でき、内容を理解しやすく、記憶に残りやすく、

目の疲れが少ないことが高く評価されていた。一方、デジタルは暗所でも読める利点が指摘された。上記に加え、デジタル文書の特徴として以下が挙げられている⁽³⁾：目が疲れやすい、入手が容易、運搬しやすい、検索が容易、辞書機能の使用、サイズやレイアウト等の変更が可能。

また、文部科学省が小学校3校と中学校2校で行った調査⁽⁴⁾によれば、児童はデジタル教科書の使用により目の乾きという問題は挙げたものの、懸念されていた頭・肩・首・手の疲労はあまり報告されなかった。

しかしながら、主観的評価と客観的評価は必ずしも一致しない。そこで次に、読みのパフォーマンス（速度、理解度、記憶、誤り検出率）を比べた実験を概観する。PCと紙を比較したMangenら⁽⁵⁾は、選択式・短い記述式による理解度テストの成績が、紙で読んだ条件のほうがよいことを示した。一定分量の文書をタブレット端末iPadまたはA5用紙で読ませた小林・池内⁽⁶⁾や書かせた岡本ら⁽⁷⁾も同様に、理解度は紙のほうが高いという結果を得ている。iPad、電子ペーパー、PC、紙を比較した柴田・大村⁽⁸⁾でも、紙条件で最も速く答えを見つけられた。また実際の文書読解場面では、相互参照や複数文書を行き来しながら読むことが多い。柴田・大村⁽³⁾はこの点に注目し、まとめ文とその元となる三つのグラフの校正を求める実験を行った結果、PCよりも紙のほうが校正速度が速く、誤り検出率も高かった。

*東京未来大学こども心理学部 (Faculty of Child Psychology, Tokyo Future University)

受付日：2025年1月21日；再受付日：2025年4月21日；採録日：2025年7月24日